

序論 本論文の目的と

ヨハン・バプティスト・シェンク のジングシュピール研究の意義

本論文は、ヨハン・バプティスト・シェンク (Johann Baptist Schenk, 1753-1836) のジングシュピールに関する研究である。その目的は、第一に、シェンクのジングシュピールに関する楽譜資料、台本、ドキュメント等を集約し、資料の記述・評価をおこない、その問題点を抽出すること、第二に、資料研究の結果を基礎として、明示された方法論に基づいて様式を考察し、その様式的特徴と問題点を明らかにすることである。

シェンクは、音楽史においては、作曲家ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven, 1770-1827) に対位法を教えた人物として知られており、自身の活動や作品についてはほとんど注意を払われていない存在である。しかし、ここでシェンクのジングシュピール作品に目を向けることは、以下の理由から非常に意義あることと考えられる。

シェンクの活動した時期は古典派の時代として知られている。ウィーン古典派として知られているのは、一般に「三大巨匠」と称される、ヨーゼフ・ハイドン (Joseph Haydn, 1732-1809)、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756-1791)、およびベートーヴェンの三人である。しかし、この三人のうちウィーンの宮廷に楽長として奉職していた人物は一人もいない。ハイドンは現オーストリア・ハンガリー国境付近を領地とするエステルハージ家に1761年から30年間奉職し、1791～1795年のあいだに2回ロンドンに演奏旅行をおこなったのち、晩年にウィーンで活動した。モーツァルトは、生涯の前半はザルツブルクに本拠を置きながら足しげく旅行を重ね、1781年以降の10年間をウィーンで活動した。ベートーヴェンがボンからウィーンに来たのは、1792年11月、すでにモーツァルト亡きあとである。すなわち、その間ウィーンの宮廷、あるいは劇場と恒常的な関係を保ち作曲活動を行っていたのは、三大巨匠以外の、いわゆる「小さな巨匠たち」(Kleinmeister)であった。本論文の本論第1部において後述するとおり、18世紀後半のウィーンのジングシュピールの作曲家は、ほとんどこれらの「小さな巨匠たち」であった。ジングシュピールというジャンルは、音楽と演劇の境界にあるがために、これまでの音楽学の立場でも演劇学の立場でもあまり研究対象に取り上げられることがなかった。しかし、モーツァルトのジングシュピール「魔笛」(“Die Zauberflöte”, 1791年

初演) やベートーヴェンのオペラ「フィデリオ」(“Fidelio”, 1805年初演) は、まったく単独に生まれたものではなく、この時代に数多く作曲されたジングシュピールの大きな流れを背景として生まれた作品である。だが、ウィーンの劇場と恒常的関係を保ちながらジングシュピールを数多く作曲した「小さな巨匠たち」には、未だ十分な光が当てられているとは言えない。このような状況のもとで「小さな巨匠」の一人であるシェンクのジングシュピールを研究対象とすることには、音楽史研究の穴を埋めるという点で大きな意義がある。

シェンク以外にも、これまで十分に研究されていない「小さな巨匠」は多数存在している。しかし、他の作曲家の場合には自筆資料が散逸している例が多いのに対して、シェンクの場合、ウィーン楽友協会アルヒーフに自筆資料がまとまって現存している点が注目に値する。すなわち、自筆資料が現存することにより真作性の点で疑問がなく、また自筆譜という一次資料を検討することにより研究の結果にも信頼をおくことができるわけである。このように、適切な研究材料が現存しているという点で、シェンクの研究には、他の作曲家の場合には得難い利点がある。

シェンクのジングシュピールについて論じた重要な先行研究は、1921年にE. ローゼンフェルト＝レーマーがウィーン大学に提出した学位論文 (Rosenfeld-Roemer 1921)のみである。シェンクの生涯と作品に関する最も新しい言及は、ピーター・ブランスコムによる『新グローヴ音楽事典』のシェンクの項目記述 (Branscombe 1980C: 624-626)である。しかし、この両者が一致している欠点は、ウィーン楽友協会に現存するシェンクの自筆譜を詳細に検討しなかった、という点である。そのために、両者とも伝承の過程で生じた帰属作品の混乱に気づかず、現在伝承している状態のままで作品表を作成し、考察をおこなった。本論文では、音楽文献学の分野で確立された最新の資料研究の方法論にしたがって、自筆譜の五線紙の種類、紙の使い方、記譜の特徴等を詳細に検討した結果に基づき、伝承の過程で生じた混乱の可能性を指摘し、資料の状態を手掛りとして本来の帰属作品の推定をおこなう (本論第2部第3章)。このことにより、本論文は、ブランスコムが作成した『新グローヴ音楽事典』のシェンクの項目の作品表に補足・訂正を加えるという、積極的な意義をもつものとなった。

シェンクのジングシュピールの作曲様式については、すでに前述のローゼンフェルト＝レーマーの学位論文で論じられている。しかし、上に記したように、ローゼンフェルト＝レーマーは資料研究という基礎を置かずに様式を論じているため、その結論には全面的な

信頼をおくことができない。本論文では、本論第2部で得られた資料研究の結論を基礎として、すなわちローゼンフェルト＝レーマーとは異なる基礎の上に様式考察（本論第3部第2章）をおこなうこととする。その際、従来の「形式」分析とは異なる、より柔軟な、ルール、大宮 1988 「総合的様式分析」の方法論に基づいて、シェンクのジングシュピールの様式的特徴を明らかにすることを試みる。また、資料研究において問題となった曲について様式的観点からのアプローチ（本論第3部第3章）をも試み、資料研究と様式研究との連関を図ることとする。

但し、ジングシュピールの様式研究においては、ルール、大宮 1988 の方法では未だ十分に考察できない側面がある。すなわち、ドラマの要素、およびパフォーマンスの要素である。本来これらは、ジングシュピールの様式を観察する上で無視できない重要な観察点である。しかし、本論文では、これらの観点の分析のための体系的な方法論が未だ確立されていないと考え、これらの分析を今後の課題として残すこととした。さらに、「総合的様式分析」における最も細かいレベル、すなわちスモール・ディメンションにおける歌詞（言葉）と音楽との関係も、興味深い観察点ではあるが、本論文ではシェンクのジングシュピールの全体像の把握を第一の目的としていること、および、スモール・ディメンションのレベルの観察と問題点が膨大な量に及ぶことが予測されること、の二点から、この問題を本論文では扱わず、今後の課題として残すこととした。すなわち、本論文においては、ラージ・ディメンション（作品のレベル）とミドル・ディメンション（作品に含まれる曲のレベル）における音楽の様式が、様式考察の主眼である。

以上述べたように、本論文は、ヨハン・バプティスト・シェンクのジングシュピールを対象とし、資料研究と様式研究の最新の方法論に基づいて、その全体像を明らかにすることを試みるものであり、古典派の三大巨匠のバックグラウンドを形成していた「小さな巨匠」の一人の作品に新たな光を当てようとするものである。